カコちゃんショウくん

かほくがた チルドレン

連載　河北潟の仲間たち　⑦

第7回　ネズミ

今年の干支、ネズミは、多くの方になじみの深い動物のひとつです。ペットになる種もいますが、駆除の対象となる種もあり、全体的にはあまり良いイメージを待たれない動物のようです。

河北潟干拓地には現在、5種類のネズミがすんでいます。ハタネズミは、畑鼠と書き、その名の通り田畑を好むネズミです。草食性で軟らかい草や根茎を食べますが、ダイコンやサツマイモなどの作物も食べるので、農家に嫌がられる存在です。アカネズミは、昆虫やクルミなどをよく食べ、森林を好むネズミです。干拓地には、樹林がほとんどありませんが、干拓地での調査結果からは、防風林帯とその付近の草地から多く確認されています（大串, 2006）。

以上2種は日本固有の種ですが、以下の3種は汎世界的に分布する種で、人間の活動とともに拡がった種です。家屋に侵入して人間の食べ物やゴミを食べるため、家ネズミとも呼ばれています。

ドブネズミは、繁華街の排水口にもすむ大型のネズミで、下水や湿地を好みます。雑食性ですが肉食性が強く、自然界ではミミズや貝類なども食べるようです。干拓地では、干陸後から農地造成が始まるまでの1970年代後半に大発生し、その後は少なくなりました（大串, 2006）。ハツカネズミは、家の中にも現れますが、干拓地の草地や畑にもすんでいます。穀類やその他の種子を好むので、穀物倉庫に出没し被害をもたらしますが、畑では落ちた種子を食べているので、作物への直接の被害はないと思われます。クマネズミは、天井裏などの屋内にすみつくネズミです。穀類や昆虫などを食べます。干拓地内では、2002年に貯蔵庫から初めて確認されました（大串, 2003）。

大雑把にみると、干拓地の農業にとってネズミ類は害獣ですが、アカネズミのように農作物とはあまり関係のない種もいます。農業被害の面からのみ、干拓地におけるネズミ類の存在がクローズアップされますが、一方で雑草の種子や害虫を捕食している可能性もあり、見えない部分での農業への貢献があるかも知れません。また、ネズミ類は、猛禽類などの肉食鳥獣の餌として重要で、干拓地の生態系の食物連鎖において要ともいえる動物です。猛禽類を頂点とする生態系が維持されること、つまりある程度のネズミがいることで、生態系が作用しネズミ類の極端な増殖が抑制されているとも考えられます。雑草や害虫・害獣を含め、動植物が豊かな河北潟において、それぞれの生物の見える部分だけでなく、見えない部分を含めて総合的に評価することで、よりよい条件で干拓地農業を続けられる条件がみつかるかも知れません。（文　高橋　久）